

# 博士学位論文審査要旨

2023年1月10日

論文題目： 「イエスの時代のユダヤ人の言語」とその呼称をめぐる言説史研究

学位申請者： 高橋 洋成

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 神学研究科 教授 勝又 悦子

副査： 神学研究科 教授 村山 盛葦

要 旨：

本研究では、「イエスの言語」ないし「イエスの時代のユダヤ人の言語」をめぐる先行研究にある「議論の噛み合わなさ」を各研究者の言語観の違いに由来するものと見なし、それぞれの研究者の言語観は「言語の呼称」に反映されていると仮定したうえで、「言語の呼称」を通して先行研究における様々な言語観を明らかにしようと試みた。

本研究第1部では、「ヘブライ語」と「アラム語」の呼称の由来を確認する。

第1部第1章では、「ヘブライ（人）」の呼称の始まりについて、アケメネス朝ペルシアにおける行政区の呼称であった「アバル・ナハラ」を、そこに住む人々（特にユダヤ人）が「内称」として受容した可能性があることを指摘した。

第1部第2章では、「ヘブライ語」という呼称が、その出現分布から、もともとギリシア語圏の人々から与えられた「外称」として始まったと推測できるとした。

第1部第3章では、「アラム」と「シリア」の混同の背景を推測した。キリスト教発生後は「キリスト者」を「シリア人」、「異教徒」を「アラム人」と呼ぶようになった。

第2部では先行研究における言語の呼称に基づき、各研究者の言語観を浮き彫りにする。

第2部第1章では、ユダヤ人共同体とキリスト者共同体の言語観、さらにキリスト者共同体の中でもギリシア・ラテン教父とシリア教父の言語観の違いを読み解いた。ギリシア・ラテン教父の言語観では「創造の言語」はヘブライ語であるのに対し、シリア教父にとっての「創造の言語」とはシリア語であり、ヘブライ語はシリア語の不純形であった。

第2部第2章では、人文主義時代のヨーロッパにおいて「ヘブライ語はバビロン捕囚以後に忘れられ、アラム語が取って代わった」という言語史観が一般化したことを指摘した。しかし、ヘブライ語が生き延びたとする意見も根強く、アラム語との関係によって「カルデア語」「シロ・カルデア語」「エルサレム語（タルグムの言語）」「新ヘブライ語」などの用語が使われた。一方で、「イエスの言語」は「シリア語」であったと表明された。

第2部第3章では、17世紀から18世紀にかけての「マタイによる福音書」の原語をめぐる議論の錯綜ぶりを指摘した。この時期は、マタイの福音書はもともとヘブライ語で書かれたとする説やそれへの批判、また、ユダヤ人が何らかの混淆語（シロ・カルデア語）を使用していたのなら、ユダヤ人のギリシア語も混淆語であったのではないかと（これを「ヘレニスト語」と呼ぶ者もいれば、「シナゴグのギリシア語」と呼ぶ者もいた）という見方などが現れたのである。

第2部第4章では、イエス自身の言語についての関心が生じた時代に、セム語研究、アラム語研究の観点から何が論じられたのかを読み解いた。とりわけG. ダルマンは「パレスティナのアラム語」から「パレスティナのユダヤ人のアラム語」を取り分け、その上でなおその中に異質な

言語特徴が認められる場合、「イエスの言語」であった「ガリラヤ方言」を同定しようと考えた。この包括的な論点整理と方法論は、20世紀半ばまで広く受け入れられることになった。

以上の研究を通して、「イエスの言語」ないし「イエスの時代のユダヤ人の言語」をめぐる先行研究の「議論の噛み合わなさ」が、互いの言語観を理解することの困難さに由来することを示し、これらを整理して今後の議論の礎を据えることができた。本研究は「イエスの言語」をめぐる諸問題の解決のために不可欠な共通の認識基盤を構築したものとして高く評価することができる。

よって、本研究は、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 学力確認結果の要旨

2023年1月10日

論文題目： 「イエスの時代のユダヤ人の言語」とその呼称をめぐる言説史研究

学位申請者： 高橋 洋成

審査委員：

主 査： 神学研究科 教授 石川 立

副 査： 神学研究科 教授 勝又 悦子

副 査： 神学研究科 教授 村山 盛葦

要 旨：

上記審査委員は、2022年12月13日午後1時10分より約2時間にわたり、学位申請者の専門分野の試問審査を行った。

学位請求論文に対する質疑応答に関しては、申請者から聖書言語に係わる豊富な素養を背景にした的確な応答を受け、本論文の学術的価値が確認された。また、申請者は本論文の主題領域について深い洞察を有していることも認められた。研究に必要な語学力については、博士論文執筆のためのヘブライ語、ギリシア語、ラテン語、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語の文献を正確に読みこなせていることにより十分なものと認められる。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

## 博士學位論文要旨

論文題目： 「イエスの時代のユダヤ人の言語」とその呼称をめぐる言説史研究

氏名： 高橋 洋成

要旨：

本研究の背景にある問いは、「イエスの言語」ないし「イエスの時代のユダヤ人の言語」をめぐる先行研究における「議論の噛み合わなさ」が何に由来するものだろうか、ということである。利用可能な資料の増加や学術分野の専門化とは裏腹に、ほとんど同じ議論が繰り返されているように思われる。本研究はその「噛み合わなさ」を、各研究者の言語観の違い、すなわち「何語がどのように使用されていたと考えていたのか」の違いに由来するものと見なし、それぞれの研究者の言語観が「言語の呼称」に反映されていると仮定した。そして「言語の呼称」と、それによって想定されている「言語活動の場」を読み解くことによって、先行研究における様々な言語観を明らかにしようと試みた。

本研究は2部に分けられる。第1部ではまず、私たちが使用している「ヘブライ語」の呼称、および「アラム語」の呼称の由来を確認する。

そもそも明確に言語を指して「ヘブライ語」と呼称する例は、ヘブライ語旧約聖書およびそれ以前の文書には確認できない。「ヘブライ(人)」の呼称の始まりについては、(1) 楔形文字文書に見られる放浪集団「ハピル」に由来するという見方、(2) 創世記におけるセムの子孫「エベル」に由来するという見方、(3) 「ユーフラテス川の向こう側」を意味する「アバル・ナハラ」に由来するという見方を検討した。これらの中で、アケメネス朝ペルシアにおける行政区の呼称であった「アバル・ナハラ」を、そこに住む人々(特にユダヤ人)が内称として受容した可能性があることを指摘した。また、ヘブライ語旧約聖書では、各巻の舞台となっている時代が下るにつれ、「アラム語」「ユダ語」「カナン語」「アシュドド語」といった具体的な言語の呼称が用いられるようになる(第1部第1章)。

明確に言語を指して「ヘブライ語」と呼ぶ例は、ギリシア語七十人訳以後の文字資料から確認できるようになる。アリストテアスの書簡では形容詞  $\epsilon\beta\rho\alpha\iota\kappa\acute{o}\varsigma$  を言語と文字に適用する例が見られる。シラ書では明確に「ヘブライ語」を指す副詞  $\epsilon\beta\rho\alpha\iota\sigma\tau\acute{\iota}$  を初めて確認することができ、ヨハネによる福音書、ヨハネの黙示録ではこれが一貫して用いられる。また、第二マカバイ記では「父祖の言葉で」( $\tau\eta\ \pi\alpha\tau\rho\acute{\iota}\omega\ \phi\omega\nu\eta$ ) の例を初めて確認できるが、第四マカバイ記はそれを「ヘブライ語で」( $\tau\eta\ \epsilon\beta\rho\alpha\iota\delta\iota\ \phi\omega\nu\eta$ ) に修正しており、類似した表現が使徒行伝の「ヘブライ語で」( $\tau\eta\ \epsilon\beta\rho\alpha\iota\delta\iota\ \delta\iota\alpha\lambda\epsilon\kappa\tau\omega$ ) に見られた。これらの出現分布から、「ヘブライ語」という呼称は初期段階において形容詞( $\epsilon\beta\rho\alpha\iota\kappa\acute{o}\varsigma$ )として現れ、副詞( $\epsilon\beta\rho\alpha\iota\sigma\tau\acute{\iota}$ )が広まり、その後に名詞( $\epsilon\beta\rho\alpha\iota\varsigma$ )が使われたと考える。他方、ヘブライ語やアラム語の文書において「ヘブライ語」および関連呼称を確認しうるのは、ギリシア語の文書に比べて時期が遅い。クムラン文書(4Q464)において初めて「聖なる言語」( $\omega\sigma\tau\eta\ \eta\gamma\iota\omega\varsigma$ )が見られ、ミシュナ(*m. Soṭah*)にも確認できるが、どちらも1例のみである。そのミシュナにおいて、明確に言語を指して「ヘブライ語」( $\epsilon\beta\rho\alpha\iota\tau$ )と呼称する例が1例のみ見られる。これらの出現分布から、「ヘブライ語」という呼称はもともとギリシア語圏の人々から与えられた「外称」として始まったと推測しうる。(第1部第2章)。

ヘブライ語旧約聖書における「アラム」について、ギリシア語七十人訳はおおむね「シリア」と訳出している。その背景にあるのは前7世紀のアッシリア時代と思われる。アッシリアがオ

リエント地方を手中に収めると、ギリシア語圏の人々はアッシリアの勢力圏に住む人々を総じて「アッシリア人」または「シリア人」と呼称した。しかし「シリア人」と呼ばれた人々は、それぞれに自分たちを指す呼称を持っており、また類似した言語を使用する人々を総称して「アラム」と呼んでいた。一方では、遅くとも前1世紀までには、レヴァントを指す「シリア」の呼称と、メソポタミアを指す「アッシリア」の呼称が分離し、さらに「シリア人」という呼称が「キリスト者」を指す内称として受容され始めた。ラビ文書でも、ヘブライ語旧約聖書が「アラム」と呼んでいた一帯を「シリア」と呼ぶようになり、「シリア人」を「キリスト者」を指すものとして用い始める。逆に「アラム人」は「異教徒」を指すものとして用いられるようになる。なお「カルデア語」と呼称される言語の実態は不明である。「カルデア語」を「アラム語（シリア語）」と同等したのはヒエロニムスと考えられるが、文脈を見る限り、「ヘブライ文字で書かれたアラム語（シリア語）」のことを、「シリア文字で書かれたシリア語」と区別して「カルデア語」と呼んでいたように思われる（第1部第3章）。

第2部では先行研究における言語の呼称に基づき、各研究者の言語観を浮き彫りにする。

まず古代において、ユダヤ人共同体とキリスト者共同体の言語観、さらにキリスト者共同体の中でもギリシア・ラテン教父とシリア教父の言語観の違いを、「創造の言語」および「イエスの言語」との関連で読み解いた。ギリシア・ラテン教父の言語観では、「創造の言語」はヘブライ語であると考えられていた。ただし、その場合の「ヘブライ語」とは、ユダヤ人に与えられた民族語と同じであると考えられる立場もあれば（オリゲネス、ヒエロニムス）、キリストによって回復された「真のヘブライの生き方」に倣う者たち、すなわちキリスト者に与えられるものだと考える立場も存在する（エウセビウス）。いずれにしても、ヘブライ語は「選ばれた民」に与えられたものと考えられた。それに対し、シリア教父にとっての「創造の言語」とはシリア語であった。そしてシリア語が変質したもの、つまり「創造の言語」に不純物の持ち込まれたものがヘブライ語であった。そのようなヘブライ語によって、神がイスラエルに自己を啓示したのは、ひとえに「神のへりくだり」を表すものであったとする（第2部第1章）。

ヘブライ語文法学の成立は、ラビ文書を「言語資料」と見なし、その記述を基に「ヘブライ語史」を再構するという視点を加えた。その「ヘブライ語史」はエリアス・レヴィタを通して人文主義時代のヨーロッパにもたらされ、「ヘブライ語はバビロン捕囚以後に忘れられ、アラム語が取って代わった」という言語史観が一般化した。しかし、バビロン捕囚以後の「いつ」ヘブライ語が失われたかについて、必ずしも一致した見解は無かった。ヘブライ語が何らかの形で生き延びたとする意見も根強く、アラム語とどのような関係を想定するかによって「カルデア語」「シロ・カルデア語」「エルサレム語（タルグムの言語）」「新ヘブライ語」など多様な用語が使われた。一方では、「ヘブライ語はシリア語に由来する」というシリア教父の言語観も、人文主義の時代のヨーロッパにもたらされた。大きな影響力を持った出来事は J. A. ヴィトマンシュテッターによるシリア語聖書の公刊（1555年）であり、そこではシリア語が「イエスの言語」であったと表明された（第2部第2章）。

ヘブライ語はいつ忘れられたのか、アラム語とはシリア語と同じなのか。この問いは形を変えて、まずは福音書の原語をめぐる議論へ飛び火する。「マタイによる福音書は初めにヘブライ語で書かれた」という伝承への批判がプロテスタント学者の間で大きくなり、それにカトリック学者が反論するという構図が生じた。また、ユダヤ人が何らかの混淆語（シロ・カルデア語）を使用していたのなら、ユダヤ人のギリシア語も混淆語であったのではないかと、という見方が提唱された。D. ハイニンシウスはそれを「ヘレニスト語」と呼び、R. シモンは「シナゴグのギリシア語」と呼んだ（第2部第3章）。

新約聖書のギリシア語に見られる独特の特徴と、イエスの時代にはギリシア語が優位であった事実に基づき、「イエスの言語」をギリシア語とする主張もたびたび生じた。その議論の中から、

18 世紀末には H. プファンクツへによって「土地言葉」の移行に関する理論的枠組みが提唱される。また同時代には L. シュレーツァーによって「セム語」の呼称が提唱されると共に、「カルデア語」の呼称が否定された。やはり同時代にはシリア地方で「生きたシリア語」を使用する人々がヨーロッパに紹介され、アラム語はユダヤ人やキリスト者に特有のものではないという認識が定着した。

このように言語研究の土台が著しく変化する中で、ミシュナのヘブライ語とは何であるかの議論が生じる。何らかの形で聖書のヘブライ語を継続するものであるという G. カルプゾフや W. ゲゼニウスの主張に対し、A. ガイガーはそれを「死んだ言語」と見なし、使用者の内的直観に基づく創造性が失われていたと述べる。このような時代の中で、史的イエスに対する関心も大きくなり、「イエス個人の言語」への興味が高まった。「イエス個人の言語」を再構しようとする様々な試みの中で、G. ダルマンは「パレスティナのアラム語」から「パレスティナのユダヤ人のアラム語」を取り分け、その上でなおその中に異質な言語特徴が認められる場合、「イエスの言語」であった「ガリラヤ方言」を同定しようと考えた。ダルマンの包括的な論点整理と方法論は、20 世紀半ばにユダ砂漠出土文書が発見されるまで、広く受け入れられることになる（第 2 部第 4 章）。

以上のようにして、本研究は「言語の呼称」という視点から各研究者の様々な言語観を明らかにし、それを軸とした研究史の基礎を構築した。